

融資姿勢 DI でみる規模別の特徴 [金融機関の融資姿勢 DI]

- ・ リーマン・ショック後、すべての規模に対して融資姿勢が大幅に消極化
- ・ 2009年4月頃から各規模とも回復傾向がみられたが、2009年7月頃より足踏み状態が続き、小規模企業に限っては再び悪化に転じた

TDB 景気動向調査では、企業に対する金融機関の資金融資の積極性を表す指標として、金融機関の融資姿勢 DI (以下、融資姿勢 DI) を算出している。

今回は融資姿勢 DI から企業の規模別でどのような傾向があるかを探った。

全体の動き

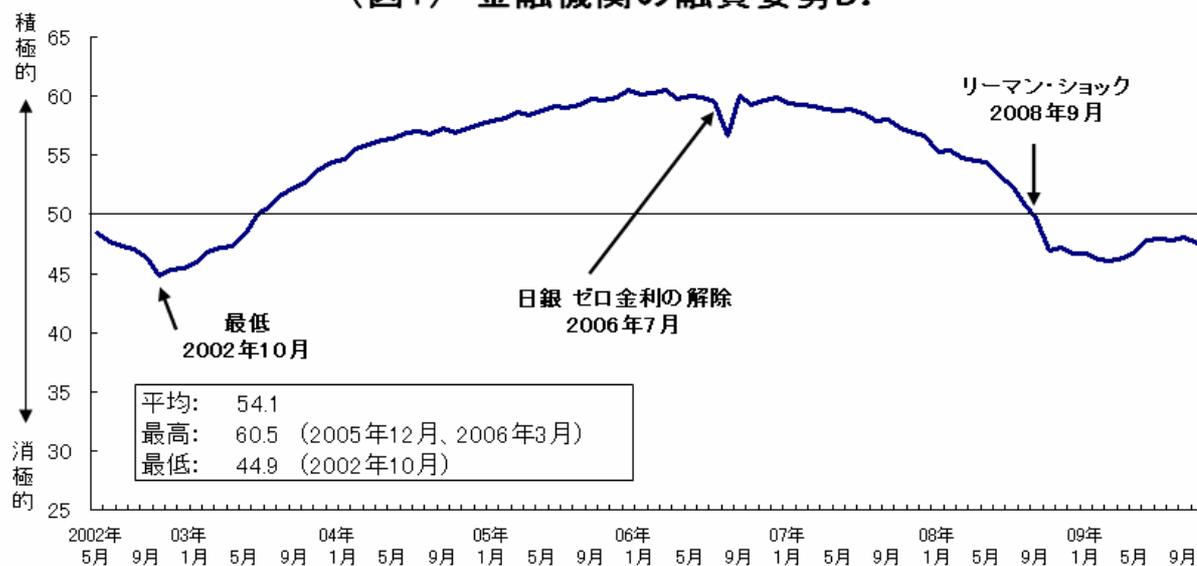
まずは融資姿勢 DI の動きを確認する(図 1)。

金融機関の融資姿勢に関する調査を開始した 2002 年 5 月から 2009 年 10 月現在までの動きをみると、2002 年 11 月から 2006 年 3 月まで改善傾向にあったが、2006 年 8 月に大きく落ち込んだ。

この落ち込みは、日銀による 2006 年 3 月の量的緩和政策の解除や、2006 年 7 月のゼロ金利解除などの影響で、金融機関の融資姿勢が慎重になったためと考えられる。その後大きな反動増があったものの悪化傾向を続けた。

2007 年中盤から 2008 年前半まではサブプライム問題が顕在化し始め、米証券大手ベア・スターンズの経営危機の表面化など世界的な金融不安の広がりを背景として悪化傾向が一段と強まっていった。

2008 年 8 月まで融資姿勢 DI は 50 を上回り積極性を示していたが、リーマン・ショックの影響を受けた 2008 年 10 月以降、金融機関の融資姿勢は急速に消極化した。

(図1) 金融機関の融資姿勢DI

注: DIは0~100、期間 2002年5月~2009年10月

当レポートの著作権は株式会社帝国データバンクに帰属します。著作権法の範囲内でご利用いただき、私的利用を超えた複製および無断引用を固く禁じます。

規模別の動き

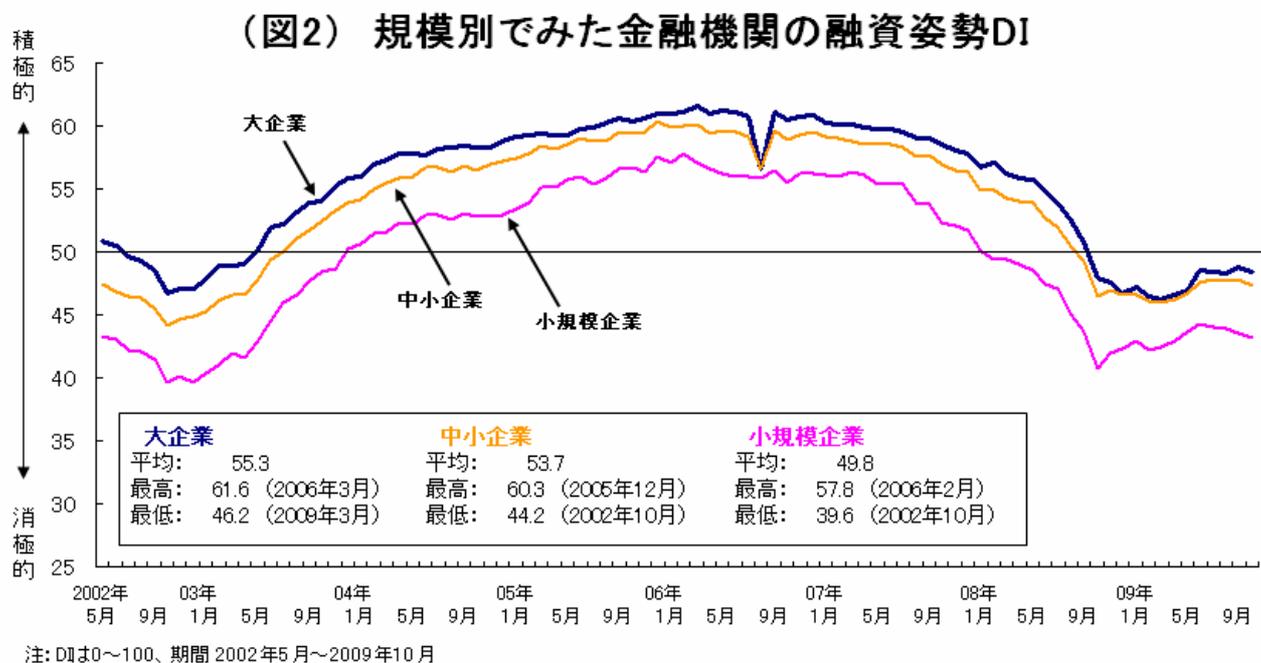
では、規模別にみるとどのような特徴があるだろうか。(図2)

各規模ともに2002年10月を底に上向き始め、2005年終盤から2006年始めにかけてピークに達している。

また、大企業は2003年5月から2008年9月の65カ月、中小企業は2003年7月から2008年8月の62カ月、小規模企業は2003年12月から2008年1月の50カ月の間、融資姿勢DIは50以上となっていた。大企業と中小企業はともに60カ月を超えているのに対して、小規模企業は50カ月となり1年近く期間が短い。また、小規模企業は最も遅くに50を上回り、最も早く50を下回っている。小規模企業ほど資金繰りが厳しい実態を反映しているといえる。

各規模の融資姿勢DIは、2006年8月を除くすべての期間で大企業が中小企業を上回り、中小企業は小規模企業を上回っている。また、リーマン・ショック前の2008年8月までは規模間の格差は概ね一定の幅で推移していた。この要因としては、図1で触れたように、全体の融資姿勢DIが変動するなかで、金融機関が融資に対する姿勢を規模ごとに調節するのではなく、規模間で比例的に連動させていたと考えられる。

しかし、リーマン・ショックの影響が本格化した2008年12月以降は大企業と中小企業の格差が縮小しており、金融機関の融資姿勢が一斉に消極化していたことを示している。



まとめ

融資姿勢DIは、小規模企業が2009年3月から、大企業、中小企業は2009年4月から3~4カ月連続で改善していた。しかし、2009年7月頃より大企業、中小企業ともに足踏

DI 分析レポートTDB 景気動向調査（URL：<http://tdb-di.com/>）

み状態が続いており、小規模企業に限っては悪化に転じた。各規模ともに依然として 50 を下回っているうえに、改善傾向にはいまだ至っておらず厳しい資金状況が続いている。

企業の規模にかかわらず、資金需要のある企業に対しては積極的に融資が行われる環境整備、施策等が重要である。

（産業調査部 経済動向研究チーム K. N）